

佳作

中央特快の夜

奇鳥みどり

初めて聡子と話したのは、薄暗い雨の日の書店の、ボーイズラブの置いてある本棚の前でだった。蛍光灯の白々しい灯りが、派手なピンクやオレンジのカバーを照らし出していた。

どうしてこういう本は、男同士が裸で見つめあっているような絵を平気で表紙に持ってくるのだろう。これで購買意欲は上がるんだろうか。そんなことを思いながら、口に出すのも恥ずかしい、耽美で下世話なキャッチコピーの全面に押し出された帯を、見るともなしに私は目で追っていた。

名も知らぬ作家の本を試しに買えるほどお小遣いに余裕はないので、家にコミックスが数冊ある馴染みの作家の新作だけに手に取った。肌色の占める割合の多い表紙に面食らって、バーコード側の裏面を上にして両手でそっと抱える。どうせレジに行けば、店員はこちらの羞恥心などお構いなしで扱うのはよく分かっているけれど、レジまでわずか数メートルの距離であっても、この表紙を人目に晒すわけにはいかない。

万引きの経験はないが、それをゲームのように楽しむ同級生たちが味わっている「スリル」というものはきつと、ボーイズラブをレジに持っていく時のドキドキと大差ないのではないか

と思う。悪いことをしている訳ではないのに、周りの目が気になる。この本を自分が読むと人に知られるのはまずいのだ。私の体面の問題である。

雨で滑るリノリウムの床の、アミダ状に入った溝を睨みつけるように下を向いて本棚の前を行ったり来たりしていたら、ふいに肩をトントンと叩かれた。びくっと体が跳ねた。勢いよく振り向くと見覚えのある顔がそこにあった。

「進学会の公立クラス、だよね」

「……はい」

同じ塾の、同じクラスに所属する子だとすぐに思い出した。少し背が低く、肉付きのよい彼女はいつも教壇から一席も二席も離れない位置に座っていたはずだ。秋のはじめ頃私は高校受験のストレスからか、出すものもないのにしょっちゅうお手洗いに行きたくなる癖がついてしまって、いつも入り口近くの後ろの席に座っていたから、塾生全体の顔を把握していた。見ているのは後頭部だから、正確に言えば覚えていたのは顔ではなくて服装や持ち物や髪型だ。彼女は進学塾の冴えない中学生の中でも飛び抜けて服装に気を使っていなかった。脂っぽい真つ

直ぐの黒髪を、いつも後ろで一つ結びにひつつめて、三、四種類しかないＴシャツとジーンズかジャージの下を、ローテーションで着ていた。黒いスポーツブランド製のウエストポーチと、Ａ４のファイルが丁度入るくらいのおおきな紙袋を愛用していた。紙袋の種類はまちまちで、パン屋の袋だったり、和菓子屋の袋だったり、電気屋の袋だったり。ノートや教科書を入れる用のトートバッグくらい買えばいいのに、いつも思っていた。ただ授業態度は真面目そのもので、印象は悪くなかった。勉強に打ち込みすぎて、その他のところに気を回す余裕もないのだからと勝手に思っていた。

けれど挨拶はおろか、まともに口を利いたこともないはずの人だ。なぜいきなり本屋で声をかけられたのか、見当もつかず押し黙ったまま眼鏡越しの瞳をじっと見つめた。

「ボーイズラブの本棚に居るのを見かけたから、声かけちゃった。私も腐女子なの」

彼女は丸い鼻を人差し指で押さえてすすすんと鳴らして、にっこりと私に微笑みかけた。私は警戒を完全に解いてよいものか判断を下げずに、曖昧な笑みを浮かべて、はあ、と覇気のない返事をした。

「的場さんのマンガ、いいよね。私も何冊も持っている」

抱えていたコミックスを指し示されて、私は背表紙の丸い書体で書かれたタイトルが、彼女から丸見えになっていたことに気がついて、赤面して本を手の中で回した。

早く着きすぎた教室は、まだほとんどが空席だった。廊下側の、真ん中くらいの位置の席に腰を下ろした。青い水玉のリュックサックを机の脇にかけて、ノートと冬期講習のテキストと、筆箱を取り出す。教室はよく暖房が効いていて、窓ガラスは結露で白く曇って、外の様子は見えない。何にしる天井に近い位置の採光用の窓しかないの、曇っていても隣のビルの壁くらいしか見えないだろう。

毎年長期休み中の講習会は、普段使っている雑居ビルとは違う会場を借りて行われた。それまで毎週の授業では曜日ごとに分かれていたクラスが全て統合され、みんなが同じ講座を受けるので、いつも使っていた教室では生徒が入りきらなくなるそう。打ちっ放しのコンクリートの壁は高く、天井と壁の境目には、壁を切り取るように横一線に窓が入っている。何のためにあるのか分からないプロペラみたいなものがダクトの間にくっかぶら下がっていて、ゆっくりと回っている。教壇の後ろには黒板がはめ込まれていて、中学校で使っているのと同じ木製の机と椅子がきちんと整列して並べられているものの、教室というよりはレストランや、教会（行ったこともないけれど）を思わせる雰囲気の一部だ。数年前までは、専門学校校舎として使われていた建物らしい。夏期講習会で講師の誰かが言っていた。

「おはよう、天井に何かいる?」

聡子の顔が視界を塞いだ。外気で冷えたせいとか、鼻の頭と頬が真っ赤になつてゐる。前髪がはらりと動くと、脂の臭いがむんとした。聡子の髪はいつも脂ぎつていて、頭の形にべったり張り付いてゐた。男性用スカルプシャンプーでも何でもあるのだから、すっかり脂を落とすものを使えばいいのに。

「あの回るやつ、何の為にいついてると思う?」

「さあ。でもトンネルにもついでるじゃん、似たようなのが。空気を攪拌してるんじゃない」

「トンネルのは外と繋がつてるよ。でもあれは、部屋の中の空気を回してただけで、意味なくない?」

「エアコンの効きが良くなるのかもよ。知らんわ」

聡子は興味がない様子で言い捨てて、隣の席に腰を下ろした。そしていつもの紙袋から交換ノートを取り出すと、私に差し出した。

「書いてきた」

「おお。続き物、終わった?」

「ううん。まだ来週までかかりそう」

「そうか。私新しい話あるんだけど、書いていい?」

「いいよいいよ。じゃんじゃん書いていいよ」

「じゃあお言葉に甘えて」

後ろの席から見られないようにノートをこっそり開くと、左には聡子の見た目の割に線の細い人物イラストがページいっぱい

いに描かれている。右のページには几帳面な字で、続きものの小説がびっしりと書かれている。聡子の小説はいつもびっくりするくらい過激なセックスシーンが付き物だったので、私はこのノートを注意を払って扱わねばならなかった。

授業が始まると私たちは筆談を交わす。ラーメンのどんぶりは受けたとか、麺は攻めたとか、そんな他愛もないくだらない話をしてクスクス笑う。たまに思い出したようにノートを取った。

お昼の間になつても、私たちは外に昼食を取りに行かず、教室で親の作ったお弁当を食べて過ごした。何人かのグループは連れ立って出かけていって、教室に残ったのは一人や二人でお弁当を食べている生徒ばかりだ。私たちは人目を気にせず、オタクトークをしながら休み時間を過ごす。

私は、私と聡子が塾の中でも派手な格好の生徒たちに白い目で見られているのを知っていた。オタクフオビアはどこにでもある。だから慎重に腐女子であることを隠さなくてはならないのに、どうでも良くなつてゐた。同じ中学の友達以外でボーイズラブの話を出来る子と出会つたのは初めてで浮かれていたのもあつたし、そして何より、どうせオタクであることを隠し通したところで、あのキラキラと青春を楽しんでいるような女の子たちの仲間には入れないことをぼんやり感じていたからだ。顔の作りも違ければ、心の構造も全く似ていないんじゃないかと思う。私は彼女たちの悩みは分からないが、いかに自分を良

く見せるかばかり考えている彼女たちには、少しでも自分の不細工さを隠そうと常に苦しんでいる私のことなんて分かりっこないと思う。

しかし聡子が己の外見をどう思っているのか、私には想像もつかない。全く気にしていないからこんな無頓着でいられるのか、それとも自分が醜いことに気がついていないのか、気づいているけれど見ない振りをしているのか、見当もつかなかった。

長く退屈な授業が終わり、日も傾き始めた頃やっと私たちは解放された。隣の教室で行われていた私立受験クラスも同時に終わり、このとき私は聡子が隣にいるのが恥ずかしくなる。顔がとも好みの男子が私立クラスには居るのだ。聡子と車で別れた後、いつも同じ電車に乗る。彼は一つ先の駅で特快に乗り換えるのが常で、同じ空間に居られるのは一駅分の電車の中だけだった。名前は他の子が呼んでいるのを聞いて知っていた。坂井晴斗だ。ちなみに、漢字は塾で張り出される成績ランキングで知った。彼は英語の点で上から七番目、数学で十八番目、国語は圏外だった。私はストーカーの如く彼の些細な情報を集めていた。知ること以外に彼に近づく方法など思いつかなかった。

いつも通り聡子は手を振って、東京方面行きのホームへと消えていく。私は聡子の姿が見えなくなる前に八王子方面行きの

ホームへと走った。階段を駆け上るとキオスクの前で坂井くんは電車を待っていた。私は近づきすぎない距離を探して、隣の隣の列から坂井くんの背中を凝視した。乗り込んだ中央線のドアが閉められると、同じ密室の空間に坂井くんと私は存在することになる。それが嬉しかった。話しかけることはなかった。電車はすぐ隣駅に着いてしまう。三鷹駅に着くとすぐ中央特快はホームにやつてくる。坂井くんの背中がその中に消えるのを見届けると、例のノートを鞆から取り出した。

聡子の書いている小説は、高校教師とその生徒の恋愛ものだった。生徒は実業家の息子で、高層マンションの最上階で一人暮らしをしている。しかし両親は殆ど家には帰らず、寂しい思いを抱えて生きている。一方教師の方は、貧しいながらも愛に恵まれた家庭で育った真つ直ぐな青年で、生徒は教師の実直さや温かさ魅かれているという設定だった。正直言って紋切り型の反乱だ。宮沢賢治にかぶれている私の書く文章は童話に哲学を織り込んだみたいな話ばかりだったから、一度聡子から萌えどころが分からないと批評を受けたことがあったが、私は自分のやり方を変えようとは思わなかった。聡子からはそれ以来、作品について何も言われたことがない。

私は今度書く話はどうなものにしようかぼんやり考えながら窓の外を見た。いつも通りのぱっとしない風景が流れていく。マンションのペランダに干された洗濯物は、風ではためいて生活臭を振りまいている。ガラスに僅かに反射する人々の顔もば

つとしない。現実の人間はどうしようもなく不細工ばかりだ。中吊り広告のタレントやイラストに見目麗しい人ばかり使うから錯覚しがちだけれど、電車一車両にまともな外見の人間なんて片手で足りるくらいじゃないじゃないか。

私は私の若さや美しさなんてものに期待しないし、身を焦がすような恋や永遠の愛情と無縁の人生を送るとしても寂しいとは思わない。私は物語の主人公にはなりえないのだから。物語は、小説やマンガの中にしかないのだから。だから私は坂井くんを物語の主人公にしようと思った。私の綺麗な小説世界の中に、彼を閉じ込めてしまいたいと思った。

『中央特快の夜』

妙なアクセントのついた声が、次は三鷹、三鷹駅です、どこからか聞こえてきました。ハルは気がつくと思慣れた中央線の網棚を見上げていたのです。自分が座席に寝転がっていることに気がついたハルは、慌てて飛び起きると周りに誰か人がいないかどうか確かめました。恥ずかしい姿を誰かに見られたかと思うと胸がざわざわしました。幸いにも、街灯もまばらな夜の街を走る電車には、ハル以外の人は誰も乗っていませんでした。と思いきや、瞬きを二つする間に、ハルの隣にはヒヨリ

が座っていました。

「みんなはね、駆け込み乗車しようとしたけれど間に合わなかったよ」

ハルは、そういうえばヒヨリと出かけてきたのだと思いつきました。するとヒヨリは先ほどのハルの失態を見ていたはずですが、ハルは恥ずかしさで頬を華果りんごのように染め上げました。

「なんで起こしてくれなかったんだよ」

「寝ていたの？ ぼく、窓の方をずっと見ていたから気付かなかった」

あんな寝方をしていたら、気付かないわけがないとハルは思いましたが、気付かなかったふりをしてくれるのヒヨリの優しさを汲んで黙っていることにしました。

「今どこにいるんだろう。三鷹ってどの辺？」

ヒヨリは細かなボールの入った紙を広げて膝に置きました。ハルとヒヨリは頭を寄せ合って、その路線図を眺めました。

「この辺りかなあ」

「こんな路線図、どこで貰ったんだ？」

「新宿だよ。君もらわなかったの」

「新宿なんて通ったかなあ」

ハルは一生懸命思い出そうとしてみましたが、どうも座席で寝ていた時より前のことがはつきりしません。

「おまえは、どこで降りるの」

「降りないよ。ぼくはどこでもこの電車に乗って行く」

「そうか……じゃあぼくもそうする」

ハルがそう言うと、ヒヨリは満足そうに頷いたのでした。

朝、たまたま坂井くんと同じ電車に乗り合わせた、それだけで一日幸せな気分が過ぎ去った。後ろ姿だけで顔は一度も見れなかったけれど、私立クラスの教室と公立クラスの教室とに分かれるとき一瞬だけ隣に立つことが出来た。ただ隣で同じ空気を吸ったというだけで、私の胸は紙風船のように軽やかに弾んだ。

一呼吸して教室に入ると、聡子はすでにいつもの席で陣取っていた。普段より遅い電車だったから乗り合わせる事が出来たらしい。明日からは一本遅らせようと思う。

「おはよう」

「元氣いいね。何かあったの」

「ちょっとね」

私はノートを聡子に差し出した。

「新しいの、書いてきた」

聡子はしばらくノートを眺めてから、にやついた表情で私の顔をちらちら盗み見た。奥二重の目が、笑うと一層細くなる。

「何？」

「いや、今度の話は明るそうだから、どういう心境の変化かな

と想って」

「別にどうもないよ」

「そう？ 最近なんかそわそわしてるし」

「何が言いたいの」

「好きな人でも出来たんじゃない」

周囲の変化にまるきり鈍そうな聡子ですら気付いたのだから、相当分かりやすく態度に出ているのだろう。気をつけなさいけない。私は忍び笑いを噛みしめながら、小さく頷いた。

授業中、いつものように筆談を交わしていたノートの端に、私立クラスの坂井くんが好きなのだと書いた。聡子は坂井くんを知らなかったの、昼休み私立クラスの教室をちらっと覗いて、肘でついて彼を教えた。

「告白するの」

「しないよ。見るだけでいい」

「プラトニックだね」

だから瞳の書く小説ってプラトニックなのかなと言って、聡子は黄色い歯を見せて笑った。

聡子に打ち明けたこともあって、私は幾分か気が大きくなっていった。同じ車両に乗る坂井くんの横顔をじっと眺めながら、今日は坂井くんの降りる駅まで着いていくことを決意した。

いつものように三鷹駅で電車が停まり、程なくして中央特快の先頭車両がホームの端に見えてくると、私の胸は高鳴った。

坂井くんは単語帳から顔を上げず、イヤホンで音楽を聴いている。だから振り向きでもしない限り私が後をつけていることに気付く訳ないのだが、それでも手のひらに汗がじんわり湧き出てくる。坂井くんが電車に乗ったのを確認すると、私も続いて隣の扉から飛び乗った。私がいつも乗る各駅停車とは違って、人の多い車内で坂井くんの姿を確認することは難しい。ただ、中央特快の停車駅を考えると、坂井くんの最寄りの駅は国分寺である確率が高いと私は踏んでいた。一つ向こうの立川駅にはいくつも塾があるから、立川に住んでいるならわざわざ吉祥寺まで来ないはずだ。混んでいる車内でノートを広げることも出来ず、私はただ揺られながら坂井くんのことを考えていた。

そして国分寺駅に着くと、予想が当たっていることを祈って、人をかき分け電車を降りた。坂井くんの後ろ姿を見つけた。あくまで自然に、この駅に用事があるような顔をしながら坂井くんの後を追う。改札を出て、左に曲がり北口の方へと歩いて行くのを見届けて、踵を返して東京方面行きホームへと走った。国分寺の、北口の方に住んでいるんだ。ほんの些細な情報であつても、知ることがただ嬉しい。家まで着いて行ったら本当にストーカーだし、そこまでは流石にしない。けれど、新しい事実を知ること、少しでも坂井くんに近づけるような気がして、私はどうしても彼を追いかけることを止められなかった。

「もうじき三鷹駅だねえ」

「うん。十一時ぴったりに着くんだよ」

電車は次第に速度を落とし、三鷹駅に停車しました。ハルとヒヨリが電車の扉から少し顔を出してプラットフォームを眺めると、暗いホームをほつんと照らし出す電光掲示板が目に入りました。

「彼方行き中央特快、十一時二十分発だつて」

「時間あるね。降りてみようか」

「降りよう」

二人は弾かれたように電車から飛び降りると、改札口に向かって階段を駆け上りました。改札はただ自動改札機が数台横に並んでいるだけで、人っ子一人居りません。ヒヨリがポケットからカードを取り出して改札を抜けるのを見て、ハルが慌てて自分の上着のポケットを探ってみますと、入れた覚えもないのにちゃんとカードが入っていました。ハルもヒヨリの後を追いつ、改札を出ました。

二人は北口の、バスの停車場のあるロータリーに出ました。アスファルトの大きな道が一本正面から伸びていて、その奥には大きなトンネルが見えました。どういいうわけか、駅前の繁華街にも関わらず、辺りには誰も居りません。

「ねえ、あのトンネル行ってみようよ」

「そうしようよ」

二人はオレンジの明かりが点々と伸びる、長い長いトンネルへと駆けて行きました。

トンネルの入り口には石碑が建っていて、『プロペラトンネル』とありました。

「なあ、見てよヒヨリ。プロペラだらけだ」

確かにそのトンネルの中には、無数のプロペラが天井からぶら下がっていました。ハルはどんどんトンネルの中に入ると、首を反らせて天井を仰ぎ見ました。すると、天井で何やら「こそそや」っている人がいるのを見つけました。

「何してるんだらう」

ハルがぼそりと呟くと、ヒヨリは両手を喇叭らっぱのように口に当てて、声を張り上げ言いました。

「こんばんはー」

「いや、どうも、こんばんは。見学の方ですか」

「はい、そうです」

「ゆっくりどつぞ」

それだけ言うと、天井に張り付いている人は、ハルとヒヨリには目もくれず、何某なにがしかの作業に戻ってしまいました。

二人は顔を見合すと、今度はハルが大きな声で叫びました。

「何をしているんですか」

「プロペラを、取りつけているんです」

ハルは何のためにプロペラを取りつけているのが気になつて、もつと訊いてみました。

「何故、つけているんですか」

「分かりませんが、私はプロペラ職人ですから。ただプロペラをつけるのみです」

プロペラ職人は、そんな質問など気にならない様子で熱心にプロペラの取り付けを続けています。二人はほんの少しだけ気味悪く思つて、来た道を引き返しました。

夕暮れ時の一月のプラットホームは、指先のかじかむ冷たい風が吹く。白くなった吐息を吹きかけて少し温めた手で、いつものようにノートを広げた。聡子の小説をぼんやりと目で追いながら坂井くんを待っていたら、同じ公立クラスの男子数人が階段を上ってきた。少しちやらちやらした見た目の彼らは、普段駅前で遊んでから帰るのか、同じ電車に乗ることはほとんどなかった。受験前の冬休みなのだから部活などあるわけがないのに、皆揃いの国分寺六中と書かれたスポーツバッグを肩から提げている。

「あ」

一人が私に気がついたようで声を上げた。私はノートにかじりつく素振りを見せながら、耳をそばだてて彼らの会話を聞いた。

「あそこにいる女子」

「何？」

「あいつ、武田だよ」

「武田って、坂井のこと好きな奴だったけ」

心臓が飛び跳ねた。ノートを握る手が微かに震える。そんなに私の言動はバレバレだったのだろうか。坂井くんのことを知っているようだが、なぜ公立クラスの彼らが知っているのだろうか。もしかしたら同じ中学なのかもしれない。隣のクラスの男子でも気づいてしまうほど、私はねっとりとした視線で坂井くんを見つめていたのだろうか。顔が火照って熱かった。赤らんだ頬を誰にも見られないように、私はますますノートに顔を近づけた。

「なんで知ってるの」

「いつもすげー見てるから、たぶんそうだったって」

「でも坂井、彼女いるよなあ」

私は坂井くんを待つことを止めて、次来た電車に飛び乗った。

最初から叶うなんて思っていたわけじゃないのに、恥ずかしくて、惨めで、居たたまれなかった。涙は不思議と出てこなかったけれど、大声で怒鳴り散らしたい気分だった。最初から叶うなんて思ってたかった、見ていただけで良かったの。周りの人にもそう知ってもらわないと、私は失恋した惨めな女みたいじゃない。

それでも私はその「彼女」という女性を見た訳ではない。決

定的打撃を与えられた訳じゃないんだ。

私に出来ることはただ一つ、坂井くんに嫌われないようにすることのみだと悟った。

この出来事から、坂井くんを目で追ってしまうのを出来るだけ止めるようにした。私のちっぽけな矜持がそうさせた。あなになんか興味はないですよ、そういう体裁を取ろうと私は必死になった。以前なら胸をときめかせていた視線がぶつかる瞬間も、今はただの恐怖だった。

聡子は今度の私の変化には、気がつかない様子だった。

二人が中央特快に戻ると、それまで空っぽだった車内には三人、乗客が増えていました。二人は新しい乗客が気になって、近くの座席に腰を下ろしました。二人が座ると、三人のうちの少し背の高い、肩までの長さの亜麻色の髪をした女の子が話しかけてきました。

「ね、どこから来たの」

「ぼく、覚えてないんだ」

きつと新宿駅で乗ったに違いないヒヨリは、ハルの隣で黙り込んでそっと二人の会話を聞いています。

「どこへ行くの」

「どこまでも行くさ」

ハルは胸を張って答えました。女の子は何がおかしいのかくつくつと笑い、隣に座っている男の子の肩を肘で小突きました。男の子は少し眉間に皺を寄せただけで、手に持っている携帯ゲーム機から目を上げようとしません。女の子は大げさなため息を吐くと、男の子の足を踏んづけました。それでも男の子は女の子を無視してゲームに夢中です。二人の子供の奥に座っているおじさんは、それをおじおじ見ているだけで、注意しようともしません。仕方なくヒヨリが声を上げました。

「やめなよ」

「いいのよ、こんなやつ。こいつ私の弟だもん」

弟だからといって、いじめて良い理由にはなりません。ヒヨリはもっと注意しようと思いましたが、女の子に睨まれて、一言も発さないまま口を閉じました。

「奥のおじさんは何なんだい」

ハルが尋ねると、女の子は髪をかき上げて自慢げに、

「私のパパよ。お小遣いをくれるの」

そう答えました。ハルとヒヨリは二人して熟れた苹果りんごのように顔を赤くしました。

ヒヨリはこっそりハルの腕をつついて、「ねえこの女の子感じ悪いよ。余り関わるのをよそう」と囁きかけました。けれどもハルの方は女の子のことを気に入ったようで、もっと気を引こうと一生懸命話しかけます。

「君たちは何でこの電車に乗ったの」

「私たちパパのお金でデイズニールランドに遊びに行ったの。そしたらポルトが故障して転覆して、それで死んじゃった。たぶんポルトの下に敷いてあるレールに流れてた電気が、漏れてたんだと思う。最期すごくビリビリしたから」

「死んだから電車に乗ったなんて、おかしいよ。デイズニールランドの乗り物が壊れるわけない。嘘だ」

「あら、全部ほんまよ。お腹に感電の痕があるけど、見てみる」
「見る」

ヒヨリはハルの首根っこを掴んで引っ張り上げました。着ているワンピースの裾をたくし上げようとしていた女の子は、今度は声を上げて笑いました。

出来るだけ水分を取らないようにして回数を抑えていたのだけれど、それでもどうしても我慢ならない時はやってくる。数学と英語の間の十分の休憩時間、私はトイレに行くために席を立った。暇を持って余っていた聡子も一緒についてきた。廊下を抜けてつきあたりのロビーには、缶ジュースの自販機が二台設置されていて、その横にあるテーブルとイスのところで坂井くんと数人が談笑していた。嫌な予感がした。

「坂井、また武田さんが見てるよ」

「えー、絶”絶”」

「武田って誰」

「隣のクラスのオタ女」

私それ知ってるよ。絶って、マンガに出てくる気配を絶つ技のことだよな。

それってつまり、私の前から存在を消してしまいたいってことだよな。

喉の奥で唾を飲み込む音がこくりと鳴った。唾を飲んだのに、私の喉の渇きは止まなかった。代わりに酸っぱい何か胃の奥からせり上がってくるような感覚があった。

目の前で否定の言葉を言われてしまうと、今まで自分が抱いてきた淡い恋心みたいなものが、汚いものみたいに思えてくる。伝えるつもりなんてないのに、見ているだけでも駄目なんだ。私気持ち悪いもんね。視線まで気持ち悪くてすみません。本人のいないところで言ってくればいいのに。手のひらに食い込んだ爪が痛い。爪切らなきや。

「瞳」

聡子の視線が気遣わしげだ。私は聡子のよく肉の付いたほつぺたを、思い切り張ってやりたくなった。あんたに同情されるようじゃおしまいだ。いや、終わってるのは私の方だ。

私の方が少し鼻が高いから、私の方が少し外見に気を使っているから、聡子を見下して一緒に歩くのが恥ずかしいなんて思う、醜い心が顔に出ちゃってるんだ、だから私は気持ち悪がら

れるんだ。

聡子は坂井くんたちから見えないように後ろ手で私の背中をさすってくれている。聡子は優しいのに。けれどその優しさが憎らしい。

私は足早に、ロビーの脇にあるトイレに入った。個室のドアを閉めてもやっぱり涙は出てこなかった。

手を洗い、聡子を待って外に出るともう坂井くんたちはいなかった。まるで私から逃げたみたいに。

私はそれ以来努めて坂井くんを視界に捉えないように、俯いて歩くようになった。そう言えば坂井くんのことを見つけ出す前までは、いつも下を向いて歩いてきた。地面を見るのが好きだったからだけじゃない、蟻やなんかの虫を踏むのが嫌だったからだ。いつも下ばかり向いて歩いてきた頃の私の方が、ずっと優しくかったんだ。

坂井くんと同じ電車に乗るのも徹底的に避けるようにした。ストーカーだと思われるのが嫌だった。私は好意を示す前からきっぱり拒絶されているのだ。

聡子はずっと何も言わなかった。ただ視線を坂井くんにぶつけてしまわぬように、必要以上におどおどしなくてはならない私を、冬を前に死にかけの蛾を見るような目つきで、そっと憐れむだけだった。

中央特快は、国分寺のホームに音もなく滑り込みました。

「ねえ、あたしここで降りるの。あなたも一緒に来ない？」

ハルはその言葉に釣られて、ふらふらと立ち上がりました。ヒヨリは慌ててハルの上着の裾を掴まんで引つ張りましたが、ハルはそれに気がつかないようで、女の子に手を引かれ、扉の方へと一歩一歩近づいて行きます。ヒヨリは悲しくて、もう少しで涙が溢れてしまいそうです。どこまでも一緒に行くと言った約束を、ハルは勝手に破ってしまおうとしますのです。

ヒヨリは女の子を何とかしてほしいとおじさんと男の子に頼みましたが、男の子は何も言わず俯いたままゲームの画面から目を離さず、おじさんは消え入りそうな声で『我々もここで降ります』と言っているそと席を立ちました。

とうとうハルは電車から出て、ハルと女の子以外人影のないホームに降りました。ヒヨリはぼやける視界でハルを見つめながら、ゆっくりと座席から立ち上がりまます。おじさんは男の子の手を引いてホームへ降り立つと、一目散に階段の方へと走って行きました。

「どこまでも一緒に行くと言ってたじゃないか」

向かいのホームに電車が来るというアナウンスが、三人の間に流れました。ヒヨリは走り出して、両の手を思い切り前に突

き出しました。

「一緒に行くと言って、言ったのに……」

ハルははっとして振り返ると、唇を噛みしめ怒りを目に灯したヒヨリの顔が見えました。それから体がぐらりと揺れて、先頭車両が逆さまに映り、真黒に塗りつぶされました。

闇をつんざくような女の子の悲鳴が響きました。ヒヨリの泣き声が聞こえてきます。正確には聞こえてくるものではありません。ヒヨリの泣き声が空気を震わし、その微かな振動をハルの体を感じ取ったのでした。ハルの体と頭はもう切り離されて、ばらばらになってしまったのです。ハルの意識は静かに沈んで、ハルの視界は暗いまま閉ざされていきました。

終わり

昼休み、渡したノートをばらばらと読んでいた聡子は、何も言えない顔をして頭を上げた。感想を言おうとして、纏められずにいるのかうーんと唸り声を上げている。自分でも投げやりな最後だったと思うので、何を言われても素直に受け止めるつもりでいた。

「びっくりした。ヒヨリがカンパネララだと思ってたのに、ハルが死んだから」

「銀河鉄道の夜、読んだ」とあるの」

「あるよ。でも私、宮沢賢治はあんまり好きじゃないのよね。綺麗すぎて嘘くさいかんじ」

「……聡子の書く小説だって、嘘っほいよ」

私はかなりむっとした。宮沢賢治の繊細な世界が合わないのは、聡子の感受性が鈍いからだ。

「あれはさ、嘘だと思って書いてるから。私が作り上げた、架空のきらびやかな世界なの。宮沢賢治はさあ、なんかほんとに『こういう美しい世界が、この世のどこかにはあるのです』って思っ書いてそうじゃん」

私は口を開けたまま次の言葉を見つけれなかった。

「あと、言いたくないんだけど……瞳の書く話って、現実の嫌なこと、押し付けすぎじゃないかなって思う。物語の世界に八つ当たりしてるっていうかさ……」

この話だってそうだよ、ハルがあの子で、瞳がヒヨリなんじゃない？ 皆まで言い終えないうちに、私はノートを聡子の手からひったくるようにして奪い取った。

言いたくないなら言わなければいいのに、見た目も悪ければ性格も悪いんだね。そんな罵倒が浮かんできて、私は、聡子といると自分がどうしようもなく醜くなってしまふことに気づいていた。気づいていてもどうしようもなかった。

「ごめんね、失恋してつらいのに、私、余計なこと言った」

聡子の言葉がいちいち気に障る。失恋は事実であっても、人

の口からなんて聞きたくなかった。

「交換ノート、もう終わりにしよう」

私はそれだけ言うと、申し訳無さそうな顔でジーンズのポケットを弄っている聡子を無視して、次の授業の準備を始めた。

冬期講習の最終日が訪れた。もうすぐ冬休みの明け、一月第一週の最後の日は、穏やかに晴れて暖かい一日になった。私は朝から悩み抜いた末、最近乗っていた電車より一本後の電車を待つことにした。坂井くんと同じ車両に乗り合わせるために。ホームで待っていて、目の端に階段を上ってくる坂井くんの

姿を認めると、私は手にしたノートを眺めるふりをして、横目でまじまじと坂井くんを見た。坂井くんは私に気付いているのかいなのか、列に並ぶといつものようにポケットからアイポッドを取り出して、耳を覆う形のイヤホンを身につけて音楽を聴き始めた。

客観的に見て美形ではないにしろ、やっぱり坂井くんの姿が堪らなく好きなのだと思つた。乱雑に生えた太い眉毛も、先の丸い鼻も、足の短くて重心の低い体つきも、すべて私の目にはよく映る。好きだから綺麗に映るのか、美しく見えるから好きだと思ふのか、どっちが始まりなんだろう。彼の目に私はどんな風に映っているんだろう。きっと歪んで醜く映っているんだろう。

やがて電車がやってきて、私と坂井くんは久しぶりに同じ空間に閉じ込められた。夕暮れ時の電車は混んでいて、顔も見えそうになかったが、それでも私は満足だった。次の駅で私は、人波に流されたふりをして、ホームへと降り立った。

オレンジのラインが走った。三鷹駅に滑り込んだ中央特快は、銀色の体に大きな口を開けて坂井くんを飲み込んでしまう。坂井くんは振り返らない。私のことなんて振り返る訳がないのだ。電車はしっかりと扉を閉じて、坂井くんを私のいない密室に閉じこめた。

走り出した風が、ホームを挟んで届くわけがないのに、私の髪は巻き上げられて、閉じた瞼を叩いた。